

ばしょうもくぞう  
芭蕉木像

種 別	小松市指定文化財 彫刻
指定年月日	昭和48年11月2日
所 在 地	寺町（建聖寺）

元禄2年（1689）、松尾芭蕉は「おくのほそ道」の道中で小松に2度立ち寄っている。小松では3回の句会が催され、4句の俳句が残されており、その後の小松の文化に大きな影響を与えている。

本像は蕉門十哲の一人・立花北枝<sup>たちばなほくし</sup>の作で、小松での滞在地の一つであった建聖寺に残されている。

北枝は、小松・松任町の研屋小路<sup>とぎや</sup>に生まれ、当時は金沢で研刀業を営んでいた。芭蕉が金沢に来訪した際に蕉門に入り、案内をしながら越前松岡まで芭蕉に随行している。

座高18センチメートル、幅17センチメートルで、木造の底面には、「元禄みのとし（元禄2年）、北枝謹て作之」とある。北枝が芭蕉に出会い間もなく制作したものであり、彫刻作品としての美術的価値のほか、文学史上にも重要なものであるといえる。



底面